「哲学的な普遍性を授けられた折り紙」、『人間会議』2008年夏号、2008年6月5日、6－9頁

「哲学的な普遍性を授けられた折り紙」、『人間会議』2008年夏号、2008年6月5日、6－9頁

世界が憧れた日本〈2〉

哲学的な普遍性を授けられた折り紙

国際日本文化研究センター・総合研究大学院大学　稲賀繁美

ホセ・ソラナによる、ウナムーノの肖像（1933年、国立ソフィア王妃芸術センター所蔵）

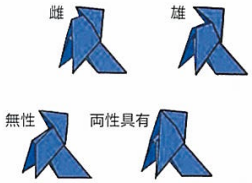
スペインの古い都、サラマンカで教鞭を執ったことがある。サラマンカ大学は、13世紀始めにはローマ教皇より承認され、ボローニャ、パリと並んで、ヨーロッパ最古の大学のひとつとして歴史に名を残す。バロックの風格を誇る旧市街はユネスコ世界遺産にも登録されている。スペインで一番美しい広場と呼ばれる、市内中央のマヨール広場から、南にフォン・セカ修道院へと至る石畳を右に入ったあたりに、ミゲル・デ・ウナムーノの旧家が記念館となっている。ウナムーノ（1864～1936）は、オルテガ・イ・ガセに先立つ世代の、近代スペインを代表する哲学者として著名で、サラマンカ大学の学長も務めた人物だ。

すぐ近くの石造りの店のウィンドウを眺めていると、不思議なものが目に入った。どうみても日本製の折り紙が、陶土の焼き物となって飾られていた。説明をみると、ウナムーノの発案になる「小さな鳥」pajaritaと書いてある。

ウナムーノには「紙でできた小さな鳥の解剖」と称するユーモラスな文章が知られている。そこで哲学者は、四角な紙を折って作られた造形を、プラトンのイデア、すなわち現象界の雛形にして不在の理想、に託す。幾何学という「種」に属するこの小鳥は、イデアたちの棲む造形的な宇宙からの使者である、というわけだ。

問題の「小さな鳥」は、日本ならば「犬」として知られる折り紙と同類のもの。

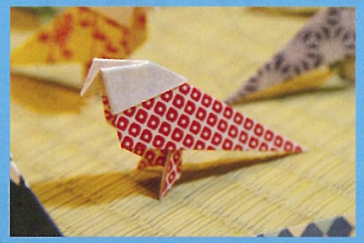
剽軽なことにもウナムーノは、自らの発案による小鳥の性別まで創り分けていた。雄、雌につづいて、両性具有のヘルマフロディタ、さらには無性の鳥、という四種類の亜種（？）を折り分けてみせている。日本ならば、平安以来とされる雄蝶・雌蝶の縁起物に、折り紙の起源が遡れることも思い出される。



サラマンカの市民は、かれらの敬愛するウナムーノ先生が「折り紙」の発明者と信じて疑わない。はたして哲学者が日本から秘かな発想を得て pajarita を発案したのか、それともプラトンのイデアの世界から直接啓示を受けて、鳥の幾何学的原型を構想したのかは、定かではない。

とまれ極東の「折り紙」は、ユーラシア大陸の西端で哲学的な普遍性を授けられた。サラマンカ日西文化センターが、折り紙を通じた文化交流の拠点としても、将来めざましい成果をあげることを期待したい。

日本で折られる「小鳥」
日本の作品



西洋の作品
"Merrymakers"
Carolus-Duran, 1870, oil on canvas. Founders Society Purchase, Robert H. Tannahill Foundation Fund. Detroit Institute of Arts. Photo courtesy of Detroit Institute of Arts.

ウナムーノは、パリへの政治亡命のさなかに、カロリュス・デュランのこの作品に描かれたような折り紙を見る機会もあっただろうか。真相は不明だが、この油絵からは、日本の「犬」がすでに「小鳥」として解釈されて、はやくも1870年ころには、フランスの公衆によって楽しまれていた様子が窺える。